

2018年度看護学部卒業生学修アンケート報告

2019年1月
教務委員会

2018年12月看護学部卒業予定者の全授業終了日に、大学での学習成果に関するアンケート調査を行った。対象となる学生数は96名、アンケート回収数は85名、回収率は、88.5%であった。

I. 質問項目

アンケートでは、以下の1~6の6つの能力に関して18の具体的な質問項目を、学生自身が大学での授業および活動を通して「どの程度身につけられたかと考えるか」ということを尋ねた。

1. 主体的行動力

問1. 自らの目標を設定し、それを達成するために主体的且つ意欲的に行動することができる。

2. 表現力

問2. 対象者の声に耳を傾けることができる。

問3. 自分の考えを学修によって獲得した知識や技能を駆使して口頭や文章によって表現することができる。

問4. 自分の考えを社会の規範を遵守したうえで、的確に発信することができる。

3. 社会貢献力・コラボレーション力

問5. 保健医療チームの一員として、自らと違う考えや違う専門を有する多様な他者（他職種）と協働することができる。

問6. 獲得した知識や技能を用いて、社会のために積極的に行動し、貢献することができる。

4. 課題発見力・課題解決能力

問7. 看護現場にある様々な問題や課題を発見することができる。

問8. 看護現場にある問題や課題解決のための方法を探索し、その成果をもとに主体的に実践することができる。

問9. 看護の発展に寄与できるよう、自己研鑽力と基礎的な研究能力を有する。

5. コミュニケーション力

問10. 自分の考えを論理的に表現、発信し、他者と考えを交流することができる。

6. 専門的知識・技能の活用力（看護実践力）

問11. 看護の対象となる人々を身体・心理・社会的な面から総合的に理解できる。

問12. 看護の対象を総合的に理解するために、豊かな教養と学問への探求心を備えている。

問13. 看護の対象を総合的に理解するために、専門的な知識技術を修得している。

問14. アートを生かした癒しの看護が実践できる。

問15. 多様な場における対象の看護課題に対し、科学的根拠に基づく判断ができる。

問16. 多様な場における対象の看護課題を解決するための実践ができる。

問17. 人間の尊厳に基づく倫理観を有している。

問18. 多様な価値観を尊重する姿勢を身につけている。

II. 評価考察

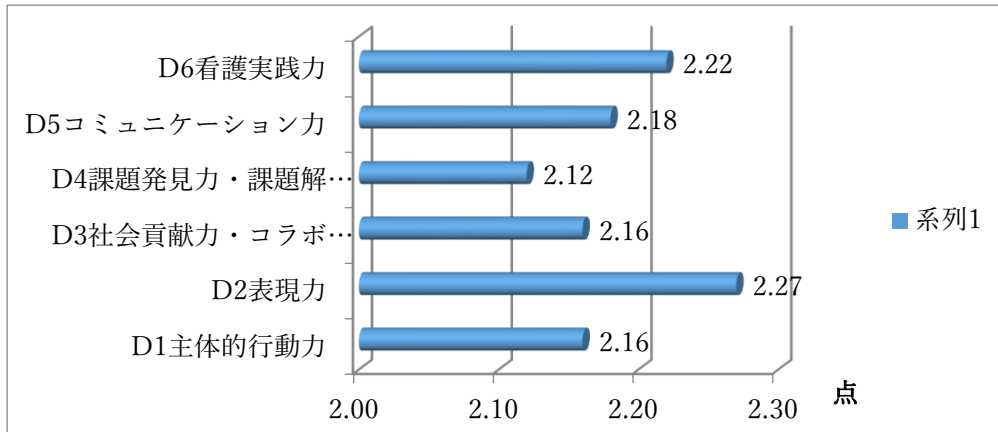
これらの6つの能力を具体的にした18の質問項目は本学のディプロマ・ポリシーで挙げられているものである。

回答選択肢は、「とても身についた」「ある程度身についた」「あまり身につかなかった」「全く身につかなかった」の4つとした。以下、「評価点」は、それぞれを3点、2点、1点、0点として算出した平均点である。

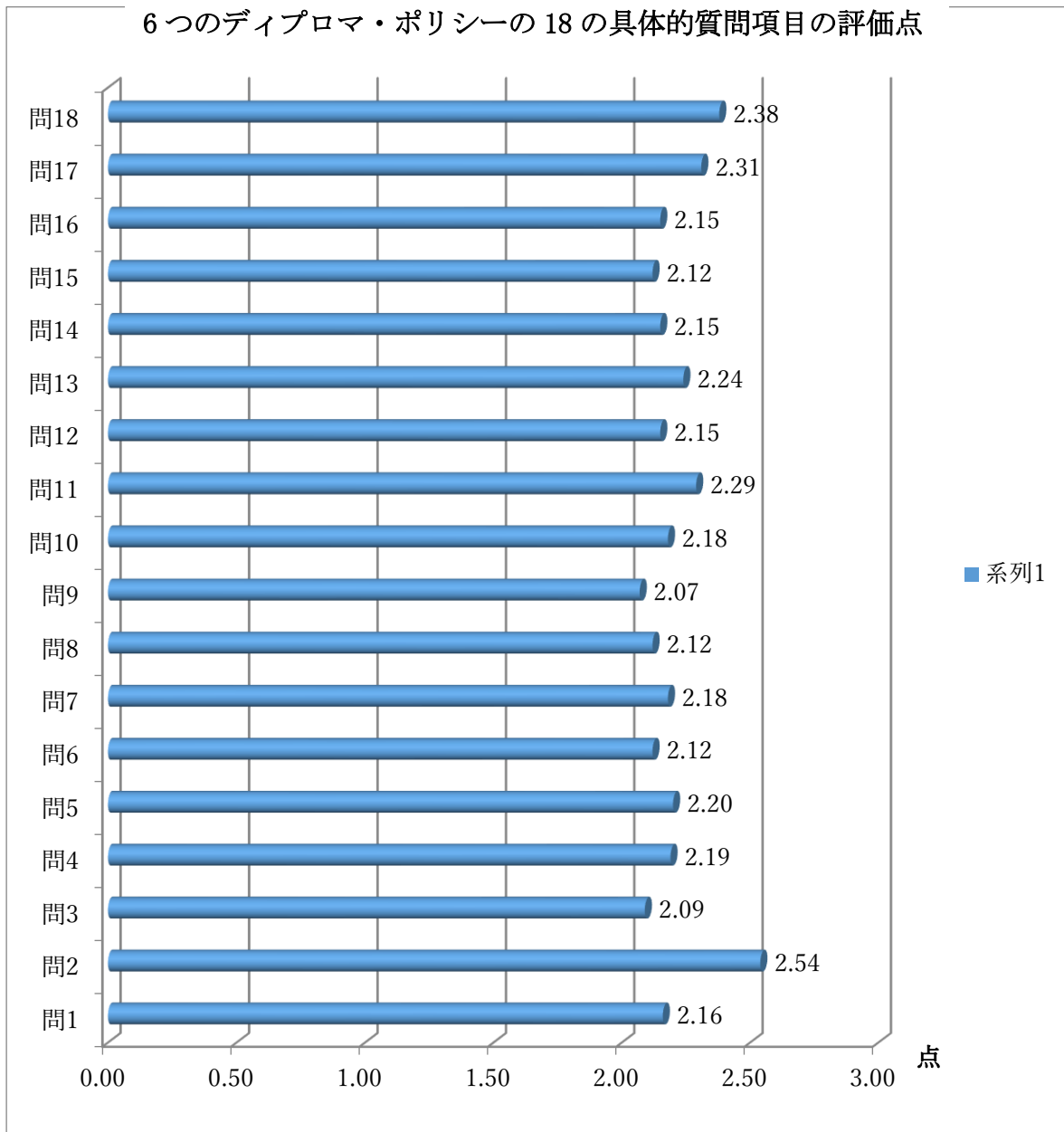
ディプロマ・ポリシー（以後Dと表記する）の6つの能力の平均点は、(2.19)であった。

- 1) 特に高評価であったのは、D2 表現力 (2.27) であった。具体的には、問2の看護の対象者の声に耳を傾けることができるの (2.54) で最も高く、55.3%の学生が「とても身についた」と答えている。
- 2) コアカリキュラムで強化の必要性が言われているD6の専門的知識・技能の活用（看護実践力）は、(2.22)と2番目に高い評価であった。具体的には、問18の「人々の多様な価値観を尊重する姿勢を身につけている」の(2.38)が最も高く、38.8%の学生が「とても身についた」と答え、60%の学生が「ある程度身についた」と答えている。「全く身につかなかった」と答えた学生はいなかった。大学教育の中で最も力を入れている「看護実践力」は、ほとんどの学生が、身についたと考える。
- 3) 3番目に高い評価は、D5のコミュニケーション力 (2.18) であった。29.8%の学生が「とても身についた」、62.8%の学生が「ある程度身についた」と答えている。ほとんどの学生が「身につけている」と答えた中で、2.4% (2人) の学生が「全く身につかなかった」と答えている。実習の中で援助的人間関係がうまく築けず、最後まで成長したと実感できなかった学生であると考えられる。
- 4) 4番目の評価は、D1の主体的行動力 (2.16) であった。91.8%の学生が、「とても、あるいはある程度身についた」と答えている。「全く身につかなかった」と答えた学生はいなかった。実習では、主体的な学習が求められることから実習を積み重ねるごとに成長したと考えられる。
- 5) D3の社会貢献力・コラボレーション力 (2.16) は4番目と同じ評価であった。87.6%の学生が「とても、あるいはある程度身についた」と答えている。しかし、12.4%の学生が「あまり身につかなかった」「全く身につかなかった」と答えている。これは、実習の中で体験や参加のレベルでの実習が多く、学生個々の経験も差があることからこのような結果が出たと考える。
- 6) 1番評価が低かったのは、D4の課題発見力・課題解決能力 (2.12) であった。89.8%の学生が「とても、あるいはある程度身についた」と答えている。しかし、10.2%の学生が「あまり身につかなかった」と答えている。「全く身につかなかった」と答えた学生はいなかった。課題発見力・課題解決能力は、実習や看護研究でその力が積み重なっていくものである。全体的に研究への取り組みの甘さが出ていたと考えられる。来年度は、研究の時間を定期的に確保し地道に努力ができるように教育を強化していく予定である。

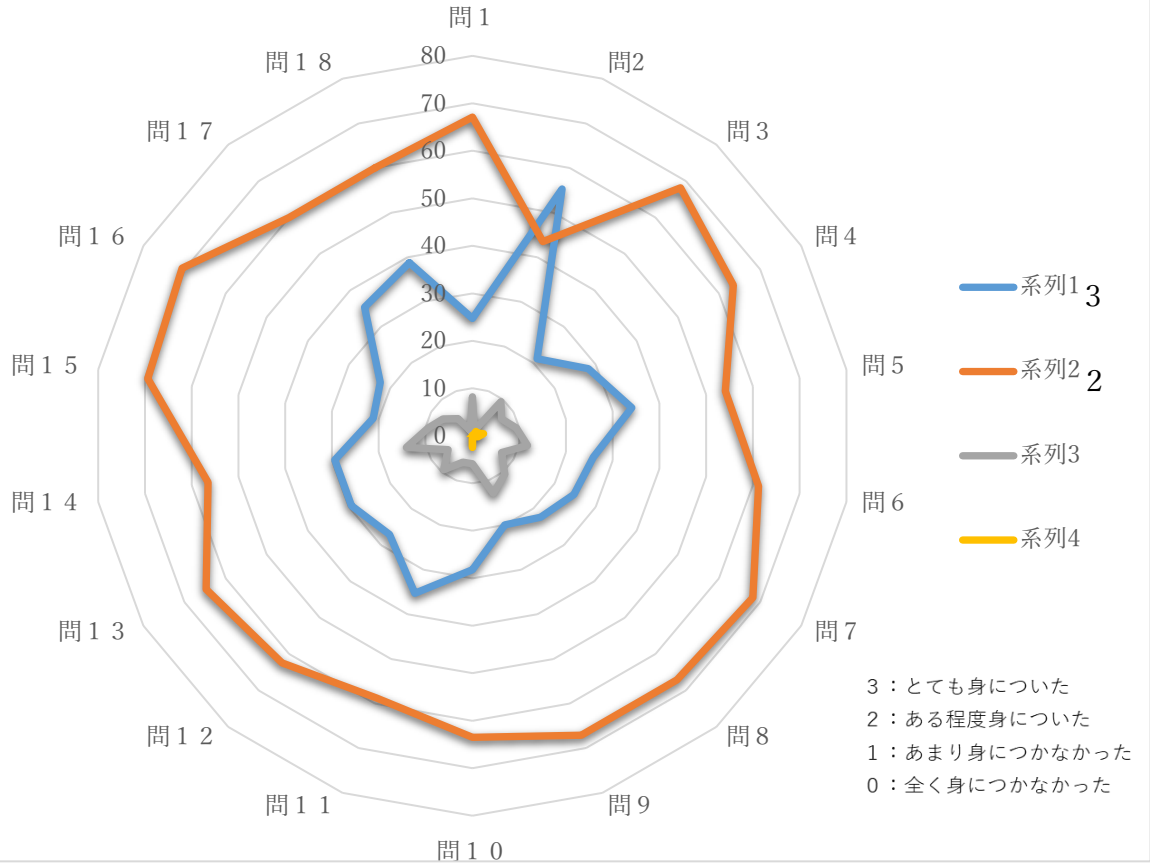
6つのディプロマ・ポリシーの評価点



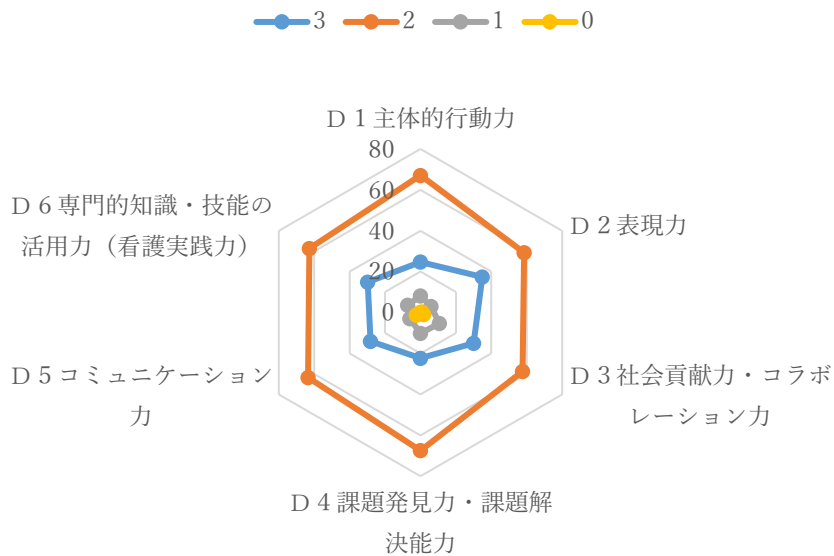
6つのディプロマ・ポリシーの18の具体的質問項目の評価点



アセスメントテスト結果



ディプロマ・ポリシーの評価割合



ディプロマ・ポリシーと評価割合

